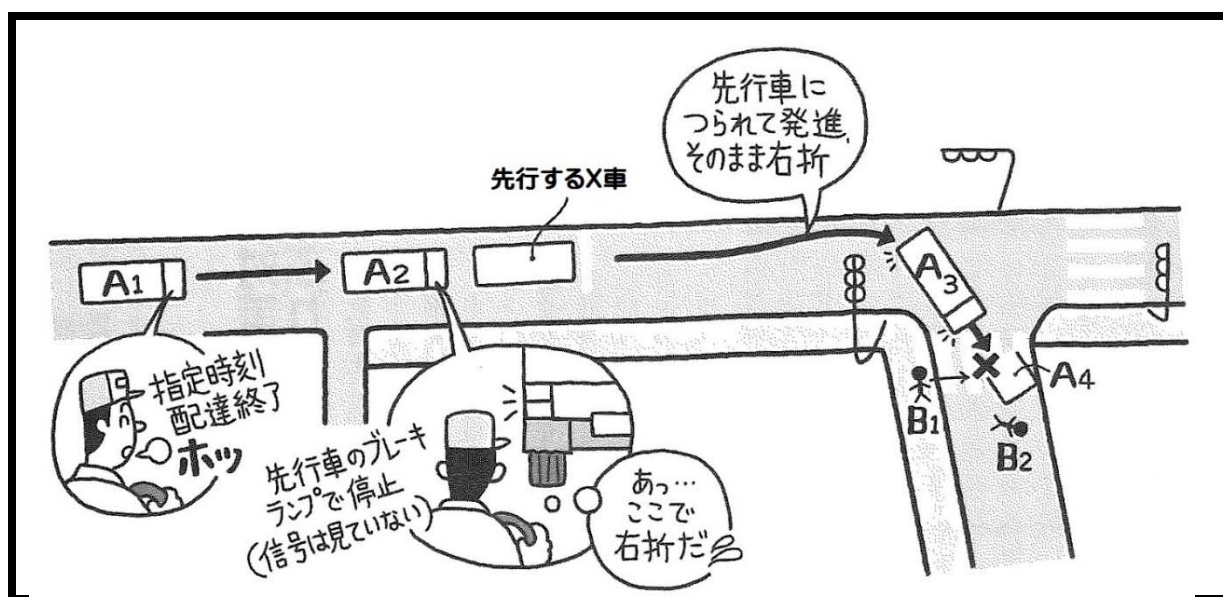


■ 事故の概況



事故類型：人対車両

発生日時：朝 晴れ

当事者A：普通貨物車 30歳代 男性

当事者B：歩行者 70歳代 女性

■ 事故の概要

Aは配達時刻指定の荷物を指定時刻に配達し終え、ホッとしながら運転をしていました。次の配達先は時間の指定がなく、急いで配達する必要はありませんでした。しかも配達先まで走り慣れた道路で、配達先の住所を確認しながら運転しなくてもよい状態でした。A車の前には、普通貨物車X車が走行しており、A車はそれに追従するような状態で走行していました。しばらく走ったところで前方のX車が停車したので、A車も続いて停車しました。ふと気がつく、次の配達先に向かうには右折しなければならない交差点でした。信号が青に変わりX車が発進したのでAもつられて動き出し、いつもほとんど歩行者のいない交差点の横断歩道のあたりで、特に注意もせず漫然と右折を開始しました。そのとき、横断歩道を横断中のBが目の前におり、はっとしてAは急ブレーキをかけましたが間に合わずBと衝突しました。

一方Bは衝突地点から約40m離れたバス停で下車して歩いていました。事故の起きた横断歩道のある交差点の歩行者用信号が青になったので、Bは横断歩道上を横断し始めました。横断歩道の中央付近まで進んだとき、Bは左方向から右折してきたA車にはね飛ばされました。

■ 事故から学ぶ

普通、私たちは緊張するとその後には弛緩するものです。年齢や経験など人によって大きく異なるでしょうが、人間が連続して緊張していられるのは約30分間と言われてます。運転中にも無意識のうちにこの緊張と弛緩を小刻みに繰り返しているのです。しかし、緊張すべきポイントで弛緩していると今回の事例のように注意が散漫になって安全の確認が不適切になってしまいます。緊張すべきところでしっかり緊張して安全確認をすることは、運転免許を取得した人が当たり前のこととしてやらなければならないことです。